

小泉成一《小春ノ日和》(新潟県立近代美術館蔵)について

小見 秀男

本稿は、当美術館の所蔵作品で、従来、小山正太郎(1857-1916)の作品とされてきた《糸を紡ぐ老婆》を小泉成一(1869-1921)の《小春ノ日和》としてあらためて紹介しようとするものである。

1 作品の概要

《小春ノ日和》(図1)は大光相互銀行(現大光銀行・長岡市)が収集した通称「大光コレクション」の内の1点で、1981年当館の前身である新潟県美術博物館に収蔵された。キャンバスに油彩で描かれ、縦57cm、横80cm(はま25号P)である。均整のとれた構図に柔らかな秋の日を浴びながら糸を紡ぐ老婆が全体に褐色の、いわゆる脂色の色調で、きわめて写實的に描かれている。前景に天狗の面、張り子の犬、独楽が点景されるなど、やや作為的ながらこまやかな情景描写がなされた明治期の農村の風俗画である。



図1 小泉成一《小春ノ日和》1888年

本作品を銀行に納めた東京画廊への聞き取り調査によれば、1950年代中ごろ、小山正太郎の遺作として社長の山本孝氏(故人)が関西で見つけた。画面の状態は劣悪で、竹内健蔵氏(修復家・

1926年東京美術学校西洋画科卒)が裏打ち等の修復したのち購入がなされたという。「作者」の郷里に里帰りしたことになる。

2 従来の帰属

長く、少なくとも1960年代以降は小山正太郎の《糸を紡ぐ老婆》(1890年)として紹介されてきた(図2)。戦後の展覧会歴として



図2 小山正太郎《糸を紡ぐ老婆》1890年

今のところ図録等で確認できるのは、大光コレクションが初めて東京で紹介された「長岡コレクション・秀作絵画展」(1961年1月・日本橋白木屋)が最初ではないか。以後、多くの出版物、各地の展覧会がこの帰属に従ってきたと思う。こうしたことの直接的な理由としては画面右下に「KoyAMAS」のサインがあること(図3)、⁽¹⁾ 作品の裏面に付けられた直弟子である鹿子木孟郎の師の作品であるという裏書き(図5)によると考えられる。さらに、画風に明治の初期洋画の特徴といわれる描写の写実性、脂色の色調、フォンタネージから受け継いだ叙情性が具わっていること。菊葉派といわれた小山の画塾不同舎の作品に往々指摘される絵作りの作為性(演出臭さ)もうか

註

(1) 小山正太郎の現存する作品は少なく、年記、サインが完全なものほとんどない。貴重な例として《糸を紡ぐ老婆》と同時期である明治美術会第2回展(1890年)に出品された《濁膠療湯黄葉村店》の署名(図4)があり、本作品にあった「KoyAMAS」のサイン(図3)と比較対照できる。

なお署名(図4)は金子一夫「歴史画と風景画のはざまに——《濁膠療湯黄葉村店》」(『日本の近代美術1 油彩画の開拓者』大月書店・1993年)から引用させていただいた。



図3 「KeyAMAS」のサイン



図4 小山正太郎(濁藤療湯黄葉村店)1890年のサイン・年記

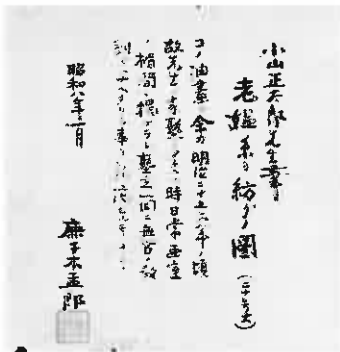


図5 鹿子木孟郎の裏書き

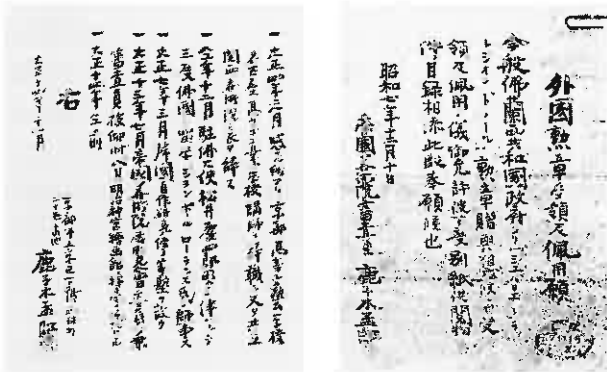


図6、図7 鹿子木孟郎の筆跡(三重県立美術館保管)

がえることなどから、たとえサインや鹿子木の裏書きがなくても小山正太郎と見做なして不思議のない作品のように思われる。当館でも収蔵以来、小山の作品として扱ってきた。

なお、裏書きが確かに鹿子木孟郎の筆になるものか、三重県立美術館に保管される資料(図6、図7)と比べてみたが、真跡と判断してよいようだ。「鹿」の筆法が違うが、鹿子木に詳しい山梨県立美術館の荒屋鋪透氏によれば署名にしばしば使われているという。

3 小泉成一の作品とした経緯

1992年7月、新美術館での展示に備えて本作品の修復を創形美術学校修復研究所に依頼した。その後、同研究所から各種光学検査の写真を添えて次のような報告があった。『小山と古以津三(小泉)成一の二つのサインがあり、小泉のサインと年記「明治廿一年仲夏 古以津三成一」は赤外線で見える。(図8)しかし、



図8 赤外線写真、画面左下に古以津三(小泉)の署名、年記が見える。

油彩によって塗り潰されているため、サインや年記をだすには上に塗られている油彩の層を除去する必要がある。小山のサインはこの層の上に落ちやすい弱い絵具でなぞられている。(図3)加筆も画面上方部と下方部にかなりある。その他の検査結果も含めて小泉のサイン、年記がなんらかの意図で消された可能性が大きいと判断される。加筆部分の除去について指示が欲しい。』以上である。これに対して、加筆を除去してできるだけオリジナルな画面に戻すように依頼した。(図1、9、10)

この結果、修復の過程で判明した事実には、署名、年記の字体と小泉の自筆の履歴⁽²⁾の字体(図11、12)とが同一人物のものと判断されることを加味し、現段階では、本作品を小泉成一へ帰属させることにしたい。

ところで、小泉成一とはどんな画家なのだろうか。先に触れた自筆の履歴によれば、本多錦吉郎の彰技堂から1886年(明治19)

(2) 宮城県庁と仙台第二高等学校に保存されている。前者は明治32年まで、後者は大正元年12月までの履歴が細かく記されている。茨城大学の金子一夫助教授が調査、収集されたものを提供いただいた。



図9 年記、署名の拡大写真



図10 画面右下隅のサイン、年記

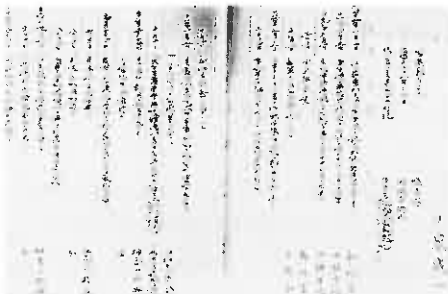


図11 小泉成一の履歴書(宮城県庁保管)



図12 小泉成一の履歴書(仙台第二高校保管)

(3)『明治期美術展覧会出品目録』(東京国立文化財研究所編・中央公論美術出版刊・1994年)を参照。

(4)『鷗外全集・第22巻』(岩波書店・1973年)83ページ～86ページ。これは芳賀徹氏によれば明治日本における展覧会批評、まともな美術批評の最初の文章であり(芳賀徹『絵画の領分』朝日新聞社・1984年238ページ)、外山卯三郎『日本洋画史2』(日貿出版社・1978年)にも同様の指摘がある。第22巻の注解には原田直次郎との合評で(執筆は鷗外)明治22年(1889)11月25日発行の雑誌『補草紙』第2号に「油畫 漫評」と題し掲載され、のち『月草』に改められるにあたって「繪畫偶評」の総題の下に六篇の論文がまとめられたが、本篇は「其一」として収録された、とある。明治美術会第1回展には50作家の119点が出品され、ほかに外国作家の作品が参考出品され

12月小山の画塾に入門したことがわかる。確かに不同舎旧友会が1934年に発行して近代画人伝の範とされる『小山正太郎先生』中の「明治十一年以後師弟ノ禮ヲ執リタル者姓名」にも岡精一の次に名が見え、中村不折の僅かに先輩であることが知れる。その後、明治美術会会員となり展覧会にも出品した記録もある。⁽³⁾

ところで、序に述べると、『小山正太郎先生』には原色版、単色版で23点の油彩画、水彩画、鉛筆画が小山の作品として紹介されている。油彩画を見ると《仙台の桜》《山村嫁女(画稿)》《春日山より米山》はあるが本作品は載っていない。水彩の名品《牧童図》も採りあげられていないため早計には言えないが、鹿子木の裏書きのように塾の教室に長年小山の作品として掲げられていたとすれば、高村真夫を中心とする編集者がこれを見逃すことは考えにくい。油彩の遺作の少ない小山ならばなおさらだろう。弟子たちの間では本作品を師の作品と見做していなかったのではないかということ推測させる。裏書きは晩年のものであり、鹿子木の思い違いではないかという荒屋舗氏の意見に頷きたい。

4 《小春ノ日和》と森鷗外

本稿準備中、森鷗外の本作品に対すると思われる批評があることを知った。1889年(明治22)10月に開催された明治美術会第1回展の展覧会評「観馬臺の展覧会」⁽⁴⁾の中に綴られている。鷗外は、先ずわが国の美術家が一、二の外人の言に翻弄され西画(油画)の短を挙げ、東画(日本画)の長を稱ふる風を戒める。そして、東画の長を認めつつ、「而れども余等は國人の審美的智識を高尚にするには、西畫を取るべき必要あるを知れり。」と講じて、その推進者たるべく明治美術会を激励し、その前途を祝福するのである。こうした所信を述べたのち、各展示室ごとに作品評を簡潔に記している。浅井忠の《春歌》、山本芳翠の《星》《夏》、柳源吉の《満野菜花》等に対してなかなか辛辣な評を下しているのだが、小泉の件はこうなっている。

「第二室。菊葉派の小泉成一氏が小春の日和は紡績の老婦を畫きて、犬張子をあしらひたり。婦の面は一種の赭色にて此派の通法とはいひ乍ら面白からず。」

と、細部に対しても厳しい眼を向けるが、このことよりも「小春の日和」「紡績の老婦」「犬張子」「赭色」の言葉を見て鷗外が評した小泉

た。鷗外、直次郎が取り上げたのはこの内の半分位の作家で、大方は「評すべきところなし」といったつれないものである。

ところが、小泉成一にはもう一点の出品作《平軍南都ニ乱入ス》にも字数を割き、「南都の乱入は世論驚々たりしかと評を闕ぐ。」と世間で評価が割れていることを報せる。鷗外は他の作家に比して小泉に関心があつたようにも思える。

の出品作が、本作品と同一の作品ではないかという想いが湧いてくる。このたび判明した制作年も不都合はない。因みに『明治期美術展覧会出品目録』（東京国立文化財研究所編・中央公論美術出版刊・1994年）に拠れば《小春ノ日和》となっており、併せて《平軍南都ニ乱入ス》も出品されていることがわかる。

以前から《糸を紡ぐ老婆》という説明調で散文的なタイトルには違和感を持っていたが、この題名なら納得できる。この作品の主題は労働図ではなく、不同舎で頻繁に行なわれたという「題画会」⁽⁵⁾で課せられたかも知れない「小春日和」というような叙情的なテーマに対する小泉の一つの応答と見做す方が、作品理解に繋がるのではないだろうか。明治美術会展出品作品の図版が見られない現在、断定はできないが、作家、制作年、鷗外の展覧会評から判断して、作家の帰属とともに作品名も《小春ノ日和》に変更してよいのではないかと思う。なお、小泉は明治美術会展第5回展にも《小春ノ日和》、《平家ノ軍兵南都ニ入ル》を出品している。本作品が第5回展出品作とも考えられるが制作年から推して第1回展が自然だろう。ところで、鷗外は「観馬臺の展覧会」の中で小山正太郎の出品作《山村嫁女》にも触れているので紹介しておきたい。

「小山正太郎氏の山里の嫁入。牛背の花嫁は梅のや⁽⁶⁾
の攻撃を受けしも無理ならずと思ふ節なきにあらず。
空の色も妥ならず。」

と、にべもない。残念なのは現在この作品の所在が確認できず、鷗外の評の当否を云々できないことだ。ただ制作年代が同じ頃と考えられている同画題（図13）が残っている。これを見ると《小春ノ日和》とは画風、様式に違いがあることがわかる。



図13 小山正太郎《山村嫁女(画稿)》1889年頃

(5)『小山正太郎先生』（不同舎旧友会・1934年）所収の石川寅治の回想に「またその頃題書というのをやった。今の漫画とでもいふべきものか、先生が「耐えがたし」とか「火」、「雪」、とか題を出して生徒に描かせる。我々はその出題に因んでいろいろと苦心して描いたものだ。」とある。漫画であり、タブローとは言っていない。筆者も漫画風の作品を見たことがある。ただ、別の安西直蔵の回想に拠れば「題畫會、講演會等アリ何レモ斯道ノ為欠クベカラザルモノナリキ」ともあり、小山の絵画指導上の重要な課程とも考えられる。出題を契機にタブローに取組んだ弟子もいたのではないだろうか。

(6)『東京新報』の展覧会評担当記者のこと。鷗外は「観馬臺の展覧會」のなかで「鶯谷の梅の屋は東京新報において、畫帖の全體を通覽するに、洋風繪畫の進歩せしは、殆外人の眼を驚かしむばかりなり、且皆日本固有の趣

5 まとめ

帰属、作品名の変更について書き連ねてきたが、まだいくつか想定される疑問についてまとめておきたい。

- ①本作品の制作時期を明治20年代とすることについて。
 - ②「小山正太郎の作品の模写」ではないかということ。
 - ③「小泉」ではなく「古以津三」という万葉仮名の署名のこと。
 - ④鹿子木孟郎をして惑わされた小泉の熟練された画技のこと。
 - ⑤このことについては、実際に修復を担当した歌田眞介東京芸術大学教授の意見を紹介しておきたい。
- 「まず、背景の壁や地面（地の部分）を仕上げ、その上から人物や点景物（図の部分）を描いていることが検査でわかる。この描法はフォンタネージから伝えられ、旧派の油絵の特徴でもある。旧派である小泉の明治21年の作品として描法上不都合はない。」
- ②の可能性については確かに否定できない。しかし、小山のオリジナルが確認できないこと。さらに、これは明治美術会展への出品を前提とするが、謹厳たるであろう明治人画家小泉が、師の作品の模写をあたかも自分の作品かのように出品するであろうか。模写ならば模写と断るであろう。明治美術会は陳列館規則⁽⁹⁾の第九條では特に模写について断っていないが、展示を許すとは思えない。署名、年記から小泉のオリジナルと見做すのが妥当だろう。ただ、石井柏亭の回想⁽⁸⁾もあり小山の何かしらの指図があったということは考えられる。
- ③他の小泉の作品、また初期洋画に類例がないか、今後も調査したい。
- ④以前、彰技堂で学んだといっても、「不同舎」入塾から僅か一年半ばかりで本作を描くにたる優れた絵画的技量が獲得できるのかという現代人の疑問である。この点に関しても明治期洋画に詳しい歌田眞介教授から急速に技量を向上させた作家の例を作品を通して具体的に教示いただいた。小泉もその一人だったようだ。それにしても初期洋画人たちの勉強振りには舌を巻く。

思いがけず作品を所蔵することになったが、初期洋画人の一人小泉成一の制作活動については、特に基準作の発見など、今後さらに調査を進めたいと考えている。

味を寫しは甚だ外人に誇るに堪へたりと褒め」で紹介している。

(7)近代美術雑誌叢書『明治美術会報告第三巻』（ゆまに書房・1991年）参照。

(8)石井柏亭『日本絵画三代志』（ベリかん社・1983年）の「工部美術学校と明治美術会」の中で、小山の作風に触れ「小山の《山村嫁女》も其の一つの例であるが、小山は其の趣味から単なる写生に満足せず、自身のものばかりでなしに其の門下の作品にも歴史的景点、人物を加えて居る。」と述べる。その例として「小泉の《平軍南都ニ乱入ス》は奈良東大寺の写生に歴史的武人を加えてあるが、（図14）之等もみな小山の指図によつたものと聞いて居る。」と記す。《小春ノ日和》にも当てはまるかも知れない。

小泉成一の略歴

茨城大学の金子一夫助教授が調査、収集された「履歴」(図15、16)、同氏の『近代日本美術教育の研究 明治時代』(中央公論美術出版刊・1992年)と成瀬忠行『続宮城洋画人研究』(1991年)をもとに作らせていただいた。

- 1869(明治2)年 8月、広島県福山市に生まれる。
- 1882(明治15)年 10月、本多錦吉郎の彰技堂に入門。
- 1883(明治16)年 4月、神田英語学校入学、18年12月退学。
- 1886(明治19)年 3月、東京仏語学校入学、同年12月退学。
12月、小山正太郎の画塾に入門する。
- 1888(明治21)年 10月、明治美術会会員となる。⁽⁹⁾
- 1889(明治22)年 10月、明治美術会第1回展に《平軍南都ニ乱入ス》、《小春ノ日和》を出品する。東京高等商業学校予備門で画学教授を担当。
- 1890(明治23)年 11月、神奈川県尋常師範学校雇となる。
- 1891(明治24)年 2月、巨勢小石、渡辺省亭に日本画を学ぶ、明治25年9月まで。
- 1892(明治25)年 神奈川県小学校教員検定委員を命じられる。
- 1893(明治26)年 4月、明治美術会第5回展に《平家ノ軍兵南都ニ入ル》、《小春ノ日和》を出品する。
- 1898(明治31)年 4月、山形県尋常中学校図画教諭となる、翌年7月退職。
- 1899(明治32)年 9月、宮城県仙台第二中学校の図画教諭となる。
- 1914(大正3)年 3月、同校を退職する。その後、東北学院でも教鞭を執った。
- 1921(大正10)年 10月、仙台市で没す。葬儀は東北学院葬として行なわれたという。墓は東京・谷中と仙台市北山の市営墓地にある。

小泉成一については佐藤明『仙台地方絵画史』(1951年)、『仙臺人名大辭書』(1933年・仙臺人名大辭書刊行會)にも記事がある。

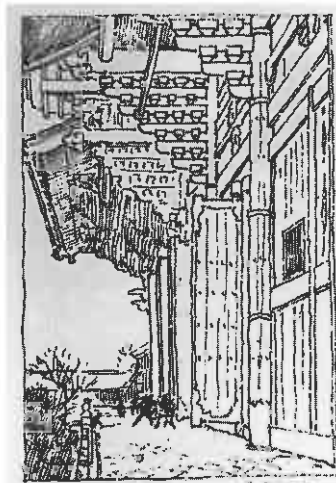


図14 小泉成一《平軍南都ニ乱入ス》の作者による描きおこし図版(『近代美術雑誌叢書6 明治美術会報告 第1巻』ゆびこ書房・1991年)所収

本稿執筆にあたって、下記の方々から資料・情報の提供をいただきました。記してお礼申し上げます。

青木茂(跡見学園女子大学・町田市立国際版画美術館)、荒屋鋪透(山梨県立美術館)、有川幾夫(宮城県美術館)、石井利治(東京画廊)、歌田真介(東京芸術大学)、金子一夫(茨城大学)、創形美術学校修復研究所、東京画廊、藤本陽子(茨城県近代美術館)、三重県立美術館、毛利伊知郎(三重県立美術館)、本井晴信(新潟県立文書館)、山梨絵美子(東京国立文化財研究所)、若松敏道(美術史研究家)、渡辺一郎(創形美術学校修復研究所) [50音順・敬称略]

(9) 明治美術会の創立は明治22年5月だが、履歴書のみとした。